



ドイツ語教育の到達目標としての通訳

著者	相澤 啓一
発行年	2009
その他のタイトル	Interpreter as a goal of learning of German
URL	http://hdl.handle.net/2241/104603

平成 21 年 5 月 27 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2005～2008

課題番号：17520365

研究課題名（和文） ドイツ語教育の到達目標としての通訳

研究課題名（英文） Interpreter as a goal of learning of German

研究代表者 相澤 啓一 (AIZAWA Keiichi)

筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・教授

研究者番号 80175710

研究成果の概要：

プロの日独通訳者たちの協力を得て行なった定期的な通訳者養成ワーキンググループの活動をベースに、「よい通訳」とはいかなるものかを考察しつつ、通訳教授法や教材の開発、通訳論をめぐる理論的考察、実際に観察される「誤訳」をリストアップして誤りの原因を分析し、そこから得られる知見を誤訳データベースとしてたちあげた。また、そして実際に通訳者として活動する上で極めて大きな助けとなることが予想される専門用語データベースの作成を進めた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合 計
2005 年度	1,100,000	0	1,100,000
2006 年度	700,000	0	700,000
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
総 計	3,200,000	420,000	3,620,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、外国語教育

キーワード：通訳、ドイツ語教育、失敗データベース、日独翻訳、ディスコースマーカー

1. 研究開始当初の背景

日本語とドイツ語の間の通訳者という、外交や文化交流において極めて重要な役割を果たす高度職業人の養成は、高等教育機関で行われてしかるべきところであるが、日本でもドイツでも行っている大学は存在しなかった。そこで、実際の通訳者の養成教育を行いつつ、通訳者養成を日本におけるドイツ語教

育の一つの到達目標と位置づけて、教育プログラムを構築し、またそこから得られる具体的な知見を学術的なディスコースに還元することが必要であると思われた。日本国内での通訳研究はもっぱら日英両言語間の通訳に対象が限られており、また、言語学的アプローチによる聞き取り能力や個々のデータの訳出率分析などが主流となっていた。ドイツ語教育に関する議論は盛んになってきた

ものの、職業教育には全くつながらないレベルの研究に終始しており、他方でドイツ語と日本語という両言語間に特化した通訳研究は、日本でもドイツでも存在していなかったのである。

2. 研究の目的

現在日本の高等教育機関で行われていない日独両言語間の通訳者養成教育を、希望者を募って実施することにより、教材や教授法についての知見を蓄積し、「よい通訳」とはいかなるものかの理論化を図ることが、本研究の主要な目的の一つであった。「よい通訳」の条件となるのは「総合的テキスト能力」である、との立場から、単なる言語変換能力レベルにとどまらない多様な文化的文脈の中で多様なケースに即して検討することをめざした。そのために、逆に「悪い通訳」の例、すなわち「誤訳」・「誤解」の通訳例をリストアップし分析することによって、「悪い通訳」をパターン化することとした。これが「誤訳のデータベース」構想である。

加えて、日独両言語間の分野別専門用語に関する辞書類が極めて手薄な状況に鑑み、専門単語リスト・データベースを作成・公開することを目指した。

3. 研究の方法

東京大学駒場キャンパスの DESK (東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター) の支援のもと、プロ通訳者及び志望者、外務省やドイツ大使館職員らにお集まりいただき毎月の月例会を、さらにはつくば市にある産業技術総合研究所のご協力も得て集中合宿セミナーを行なうことにより、通訳者養成教員として、教育方法や教材、教授法についての知見を毎回蓄積し、「よい通訳」とはいかなるものかの理論化を図った。通訳者がいかなる点に躓いたり、分かりにくい訳をしてしまうかについて、個別ケースを収集し、まとめていった。また、ヨーロッパ初の日本語を含めた通訳者養成コースを立ち上げようとしているハイデルベルク大学とも連携して、ネットで結んだ共同会議も行なったり、講師を招いて相互の情報交流を行なったりした。単語リストについては、多くの通訳関係者の協力を得て、日独両言語間の分野別専門用語のデータベース作成を行なった。

4. 研究成果

ドイツ語教育分野でこれまで空白地域となっている、高度専門職業人としての通訳者養成に向けていかに道筋をつけるか、という課題に理論と実践の両面から取り組み、一定の成果をあげることができた。具体的には、すでに活動しているプロ通訳者及び志望者、外務省やドイツ大使館職員らの参加を得たワーキンググループをベースに、「よい通訳」とはいかなるものかを考察しつつ、通訳教授法や教材の開発、通訳論をめぐる理論的考察、実際に観察される「誤訳」の分析から得られる誤訳データベースのたちあげ、そして、実際に通訳者として活動する上で極めて大きな助けとなることが予想される専門用語データベースの作成、といった作業を進めてきた。

これらの専門用語データベース (<http://germanistik.jp/woerterbuch/>) や、誤訳のデータベース (<http://germanistik.jp/fdb/>) のネット公開は、残念ながら未だ試行段階の域を超えるものではないが、さまざまな試行錯誤を経て困難な点が分かってきたことを踏まえ、今後も専門用語集の分野別整備と訳語の質的向上作業を続けてゆく。質的・量的にある程度満足のゆくデータベースとするには今後もかなりの作業量が必要であることは、着手して初めて分かったことである。例えば、現段階で専門性の高い用語ばかりを集めて総計7万語に及ぶリストは、それだけでも極めて貴重なものとなりつつあるが、重複や分類の不備、訳語の信頼性のバラツキなど、まだまだ解決すべき問題が多い。その社会的ニーズに鑑み、今後も継続的に作業を行ってゆくこととなる。

その大きな方向性としては、分野別単語リストとしての整備である。上記用語の中で、例えば「原子力」に関する単語として、約950語を抽出することができる。そのリストすべてをここに掲載することはできないが、アルファベット順で最初の10語を掲載すると以下のようなものとなる。そのほとんどが大独和辞典などには載っていない専門用語ばかりであるが、仮に原子力関係の通訳をすることになった通訳者にとっては極めて重要となる用語ばかりであり、これら10語だけでも、本リストの専門性と密度の一端が示せると思う。

Abblasebehälter	予備タンク(圧力を逃がすために吹き出した冷却剤を受ける、予備タンク)
Abblaseventil	吹き出し弁(圧力を逃がすために吹き出す弁)
Abbrand, Steigerung des Zielabbrandes	減衰、バーンアップ、減衰目標を上げること
Abfahren	(原子炉の)停止
Abfallaufbereitung	核廃棄物処理
Abfallbehandlung	核廃棄物処理
Abfallgebinde	容器入り廃棄物
abgebrannte Brennelemente	使用済み核燃料
abgebrannter Brennstoff	使用済み核燃料
Abklingbecken	減衰プール

また実際に養成される質の高い日独通訳者たちは、本研究プロジェクトからすれば単なる「副産物」に過ぎないが、本研究が生み出す極めて大きな社会的成果である。これら参加者については、実際に通訳・翻訳業務に携わっている者も少なくないが、まだ 20 代程度の若い参加者のうち将来的に通訳者になることを希望する数名は、ドイツ・ハイデルベルク大学に 2009 年冬学期から新たに設立される予定の通訳・翻訳学部の日独語コースに進学することとなっている。

さらに、上記研究会等で得られた知見を、学会等での発表や論文の形で公開してきた。例えば、2006 年の上智大学における通訳者養成に関する専門家会議では、日独通訳者養成の現状を報告する中で、初心者向け外国語教育の枠内で通訳者養成の手法を採用することへの懸念を述べた。特に近年、第二外国語教育としてのドイツ語教育の行き詰まりからか、通訳経験の乏しい教員が目新しいやり方で学生の興味をひきつけるべく、シャドーイングやサイトラなど個別のトレーニング方法を「通訳教育」を謳った安易なツールとして教育現場に持ち込みがちであるが、それらが必ずしも初心者向け教育において効果

的でないだけでなく、通訳という専門性の高い総合的知的作業をあたかも表面的言語転換に還元できるかのような誤った理解を根付かせかねないという意味で有害であることを指摘した。

また 2008 年金沢におけるアジア・ゲルマニスト会議においては、本研究の誤訳データベースの成果として、独日通訳・翻訳において誤訳が生ずる最大の原因が「辞書に忠実な直訳」というイデオロギーにあることを指摘した。学生たちの多くは、中学校における英語教育以来、外国語辞書に頼り、むしろ辞書に支配される外国語教育に慣れてきている。逆に、辞書に忠実な訳語さえ使っていれば、どんなに非日常的だったり理解不能だったりする訳文を生産しても平気でいられる事態もしばしば見られる。従って多くの場合、通訳者養成教育の第一歩は、そうした辞書支配から学生を解放し、辞書に書かれている訳語に拘束されない形で文意を自らの頭で考えて訳す態度を身につけさせることから始めなければならない。一流のプロ通訳者ですら、「困ったときの辞書的直訳」という事態にしばしば陥る現状を分析しつつ、辞書を単なる補助ツールとしての本来の役割に還元し、通訳・翻訳の意義があくまで元テキストの意味を異言語に移すという作業にあることを銘記した。

さらに 2008 年早稲田大学における翻訳シンポジウムにおいては、近年のポストコロニアリズムの流行に安易に乗った「文化翻訳」というキーワードのインフレ的な使用に対して警鐘を鳴らした。ホミ・バーバから始まってドイツではバッハマン・メディックらが盛んに提唱している文化翻訳というコンセプトが、単に現在の異文化間交流のありようを不正確に捉えているのみならず、「翻訳」という概念が本来持っていた言語翻訳における意味と、そこでこれまで重ねられてきた精密な議論を空洞化しかねない危険をはらむものであることを指摘し、本来は言語間にしか用い得ない「翻訳」の概念を「文化の翻訳」といった比喩的な意味で用いる際に生ずるさまざまな問題性を分析した。これらの研究成果は、現在刊行作業が進められている論文集に収録される予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

- ① 相澤啓一、Worttreue oder Äquivalenz? (印刷中)

- ② 相澤 啓一、Fremdsprachigkeit und Fremdkuluralität – Wider die kulturwissenschaftliche Metaphorisierung der Übersetzung (印刷中)
- ③ 相澤 啓一、Zur Ausbildung der japanischsprachigen Konferenzdolmetscher für Deutsch 文藝言語研究 言語篇 査読無 第52巻 2007年 p.177-199

〔学会発表〕(計3件)

- ① 相澤啓一、Ausbildung der japanisch-deutschen Dolmetscher シンポジウム „Dolmetschunterricht an japanischen Hochschulen“ (日本の大学における通訳教育をめぐって)、2006年11月18日、上智大学
- ② 相澤啓一、Worttreue oder Äquivalenz? 国際シンポジウム Asiatische Germanistentagung、2008年8月28日、金沢星陵大学
- ③ 相澤 啓一、Fremdsprachigkeit und Fremdkuluralität – Wider die kulturwissenschaftliche Metaphorisierung der Übersetzung、国際シンポジウム “Übersetzung und Transformation. Umformungsprozesse in/von Texten, Medien, Kulturen”、2008年10月18日、早稲田大学

〔その他〕

公開中のホームページ：

専門用語データベース

(<http://germanistik.jp/woerterbuch/>)

誤訳のデータベース

(<http://germanistik.jp/fdb/>)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

相澤 啓一 (AIZAWA Keiichi)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授

研究者番号 80175710